洗湯手引草

六七
858
54

国立国会図書館　タイトル『洗湯手引草』 請求記号 858-54

ガラス使用

目録

一洗湯之由来一
一湯治教一
一湯屋番組大意一
一同十組別当一
一大行事順番附一
一湯屋萬事暦一
一中昔湯屋諸奥記一
一見世法度書之事一
一湯屋頭取之事一
一湯屋組金證文之事
一同賣湯況文之事
一早別附
一奉公人請状之事
一同引取一札之事
一諸薪古木之拂別
一同車之積込員数
一松木拂別直段附
三寶日城之事

国立国会図書館

夫湯屋営業ハ
捷径の教ハ
なれハ高きも
そ裸よりハ天地自然乃道理
まて二おもむく
十徳善き者も

もちろんのも於坊さんも
産まま〳〵の姿にて悟り
の海へざぶり〳〵無欲のか
と梵脳とあい〳〵清めて浄湯を
浴る、其様も堂々ふ
同じ裸身仏きょいのも
老人義風呂

這入ば吾も〳〵と念仏
白眼の使容も裸
おそれ已〳〵恥を
あまり湯を我〳〵
と堪忍成ず石榴口を
無礼おそれの、是洗湯

国立国会図書館　タイトル『洗湯手引草』　請求記号 858-54
ガラス使用

乃徳ならずや無事を孝
ともやすく養ふ事あた
へ川洗湯
くふさぐをそれがため
の道あつ湯をとつて身を
あたゝめ湯ぜに
ばし一病を治し学ひ
まかゆ銭とめ心よく
ねかふ事

めるの、是別仁ならずや
ござ
ますまんと他人の桶
番桶を我住よをいそぐ
たゞし無元の仁ハ汲で
義也田舎者でぶつ
ぬ物でさびし
ハおゆまりみ

国立国会図書館　タイトル『洗湯手引草』 請求記号 858-54
ガラス使用

お静かに於て貴下林禽氏と
する、則洗湯籐あつて
設けて垢を落し石を湯で毛を切り終て
身拵て髪形城直をたゞし則衣也
湯が集いと云ハ水をうめ四つ湯
をうめ互ひ誉毋をほめあひ老る

仁す、湯を汲でゆるたゞし則信也かる
男生をたゞし則信也かる
の楠を西方圓よ随道を能く悟
て流れ板をめぐり已が心を常に
慶諸の垢をた事ハれこの
道具我家ゟ驕奢の風を除ハ

国立国会図書館　タイトル『洗湯手引草』 請求記号 858-54
ガラス使用

も何時(いつ)も早仕舞(はやじまい)也五倫(ごりん)の勤(つとめ)も
天地(てんち)の事(こと)の頼(たのも)もすべて
一(いち)ト通(とおり)の見(み)世先(せさき)万事(ばんじ)よろづ心(こころ)を用(もち)ひず空(むな)
只倫喜(ただりんき)迷惑(めいわく)奢楽(しゃらく)の高(たか)ごと
文言(もんごん)を以(もつ)て守(まも)ることなり
湯(ゆ)を出(だ)すより日(ひ)の傾(かたぶ)くまで

且(かつ)客(きゃく)の見(み)る者(もの)あれば
筆(ふで)に採(と)りて画事(かくのごと)を以(もつ)て
右通(みぎとおり)私(わたくし)ども湯屋(ゆや)渡世(とせい)
営(いとな)む人(ひと)

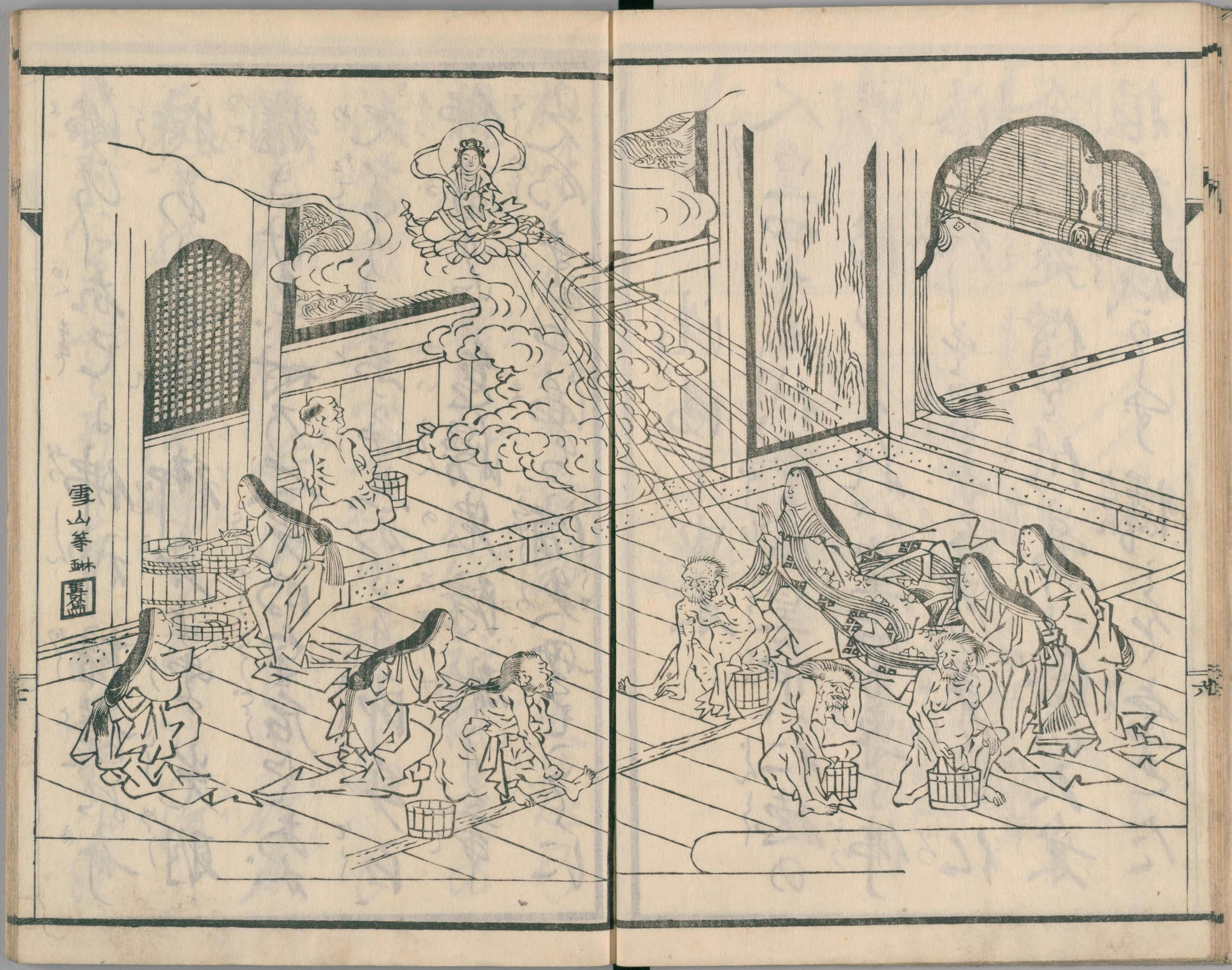
嘉永四年亥年六月

国立国会図書館　タイトル『洗湯手引草』　請求記号 858-54
ガラス使用

洗湯之由来

人皇四十五代聖武皇帝、仁徳の
君之御時、それ皇后も専ら佛
法を信じ多くの仏
舎利建僧を供養し給ひ大衆
根機浅深ず懺悔
たま

国立国会図書館　タイトル『洗湯手引草』　請求記号 858-54
ガラス使用



国立国会図書館　タイトル『洗湯手引草』 請求記号 858-54
ガラス使用

海ひ[ま]ら於[ゆく]已[もそ]よ佛[ぶつ]神[しん]權[かり]護[こと]奇[き]特[どく]あ〳〵ま[ら]れ神[しん]通[つう]身[み]よ事[こと]光[ひかり]耀[かゝや]きけ[ま]ば衆[しゅ]人[にん]光[こう]明[みやう]を[め]たてまつ[と]りまのあたり[ぶつ]佛[ぼさつ]まつりて[たいまん]夫[ふじん]人[にん]の[こうごう]皇[くわう]后[こう]をあが[こうめう]光[さいしょう]明[こう]皇[くわう]后[こう]ま[ま]ち浦[うら]ち清[きよ]免[めん]

[ささき]右大[うだいじん]臣[の]鷲[おとゞ]執[とろき]恩[おん]厩[うまや]を農[かろき]起[たまろ]作[いとる]治[よくしろ]宝[たから]銭[ゆたか]豊[ある]み千人[ひと]能[のう]施[ほどこ]清[きよ]免[めん]給[たま]ん[ち]と誓[ちか]ひ[ぶつ]自[みづから]誓[ねがひ]願[ごと]元[がんか]下[りよじん]の旅人[たつときやから]生[いきとし]ける物[もの]を[こゝ]ま[もう]で来[こ]ん[ま]ま[ま]で[こと]古[もの]

国立国会図書館　タイトル『洗湯手引草』　請求記号 858-54
ガラス使用

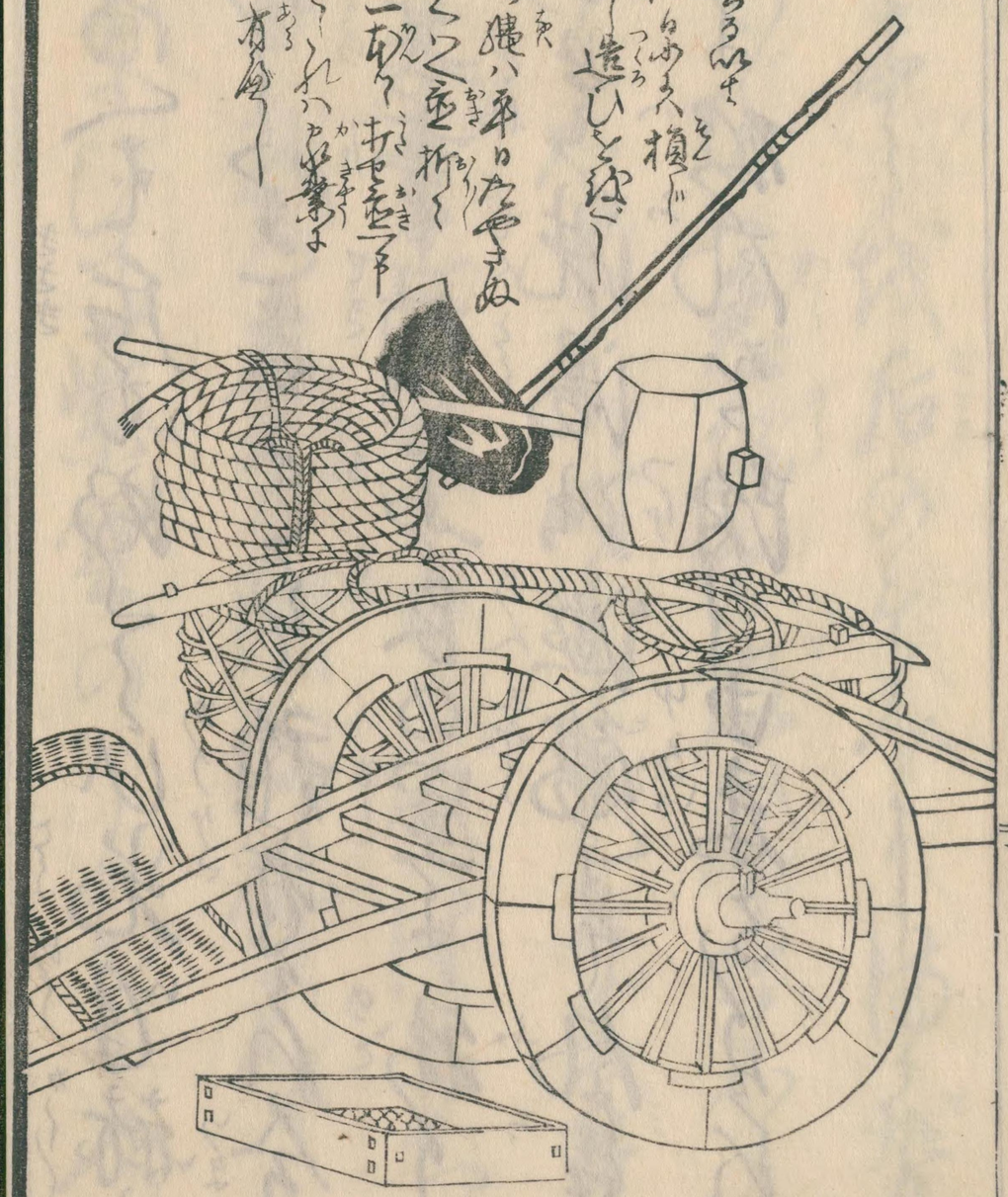
小女郎もおもてに石を投げ
ぬれ給ひぬ伝悩顔を宮
せんと事自汚穢乃舊垢を流
浄め半身を出しそれを拾ひ
して都合猫疥癬
吸ひ半身を出

水死を願ぬ九百九十九人の数も
満てきたりて大願成就す
至求ときも魚肉と
七弓く出来多和
猫血係ぬ
多くの宝女鼻を
掩ひかく

国立国会図書館　タイトル『洗湯手引草』 請求記号 858-54
ガラス使用

いく春秋后のそしり
こゝろぐるしき煩悩を
なくしたまふ時
より金色のひかり
普照我ハ東方阿閦佛
ゐまして紫雲の
ごとき
末代まで后も
とあるまことそ
り甚事績多良の
影を洗湯
のよう破風を附
曲

右之道具ニ而
両脚ニ体ヲ
乗セ真ニ進ひ
井戸綱ニ縄ハ
ヲ
朝仮ニ小一
若是ヲ
多ク有



此湯語教ハ湯女言観世音洗湯ノ
親則ヲ釈氏ヲ湯澤山清水院
定親ヨ此喩方便ヲ
洗湯寺沐浴上人ノ
宗生ヲ如是我聞ト授ケ
誓ヲ寿ク

国立国会図書館　タイトル『洗湯手引草』　請求記号 858-54
ガラス使用

ひとあれ湯屋を
新のおしのげ教し
平生れ身もちふか
釈湯屋のこと能を
湯話数なも主を
自高慢の意よけひ
玉ふ板書新を割り看中
なが主元手間も湯屋ものの
奴婢も使も主人小生
風と賢人多綴し
服まが元もも
歳あるも戯書も

国立国会図書館　タイトル『洗湯手引草』　請求記号 858-54
ガラス使用

書一白癜なる人の
ことく紙ふるへ
かゝるく眼の
ごとくてかゝるより嗚呼
湯あみして酒屋
文めいかゞせん

湯話教

葛高故不楪參沐有古本新寫貫

楪肥故頭人不浴沐有客致多寫貫

湯至者足一生戒

湯楪足万代戒

命終必勿滅更

国立国会図書館　タイトル『洗湯手引草』 請求記号 858-54

ガラス使用

湯気不廻(二)元気常客(一)入
石垣不廻(二)藤汁(一)楓
風呂内湯有減(二)
雖(一)積一日(一)混金(一)
多高実常不(レ)合(一)

井(一)
裏(一)
不如(一)
三百六拾本虚楔
答屋足高戻物答(一)
一日前一本除楔
一本不洗助数日
故客斗不(レ)返
石仕舞云(二)

答客来不(レ)換漏遅
一日前一本除楔
一本不洗助数日
故客斗不(レ)返
石仕舞云(二)

国立国会図書館　タイトル『洗湯手引草』　請求記号 858-54
ガラス使用

罣天日く逐盜賊
心神不安く奇労
遂時亡魚不能審
盜而後雖恨悔
猶言沢雪二不益
故夏眠假勿審
添雷是居増眠
燥湯冬常不食氣
面向能而心用外
他人不我友誰言
老甚多出くれ入大
恭平國恩契地
德澤萬物感
手湯如映月
水く恩着深近海
上水甚湯冬如氷

国立国会図書館　タイトル『洗湯手引草』　請求記号 858-54
ガラス使用

堀井戸裏冷之湯　深井戸綆早二反替

諺之徳者高従山　従本訪新従海新

物放二雨人下押　大勝押終成宿箏

三賢位於除浅　色表浅之程第

弱我弱我式高要　当者之利也

少湯浅子供引連　擬八文湯温加減

有物言者有湯言　真似木臭湯会得

湯酒好神海猫理　抹返而成炎腰之

終板小桶湯高生　弐風呂中放雲

云之疾程石盗児　備之物文次名迚

惣て人情單平ら
女髪洗不迚種会
汲中湯人當世想
裸体延禮義當長湯
子供利用代注進
小桶要際迚引附
雖強雪干合之
嘸嫁姑成沢當改
況乂雑堂く繁
従巳未戸楯
従朝晩間来戸楯
お晩ゟ来楯擬
一日く休国事ふ願
要凌署名防室
氣侭我侭次第
安哉安哉此高賣
皆当人皆言樓之
腰之時ゟ来ル客
客者云く妻ゟ迚
有言書附云長迚

国立国会図書館　タイトル『洗湯手引草』 請求記号 858-54
ガラス使用

来和忠厚僅堪
日くに新京新仕込
鉄炮箱際ハ歩板
釘ハ三寸以前枠
風呂三寸以前枠
ろハ三寸をもって
風呂内上ニ泥漆喰頂
ふろのあがりぶんちかぶろより
そこまでこてにてぬりそって
唐津褌塩言ふ湯
有ゆ頂上ニ金看
ちのぞろまでありていふるい

湯屋流板間下水
ゆやのながいたのまのげすいは
火鉢ハ建上塗家
ひばちはたてあげぬりや
囲煙除悪火用心
ひもうけのかこいにのぞんまろし
施釜和有換多持参
ほどこしかまはまたいきまはそんもつあり
換松人金筆落雲
ごみとりもとも松のえんくげい

水ハ行ハ浄高下炊
みずはいきはじょうたかしたき
害毒画北煙出東南
がいどくえきたばこでけむりをだすべし
休ム毎火鉢煤下掃
やすむごとにひばちすみをそうじすべし
縄ハ毎ニ石仕者運賃
なわはまいこくしかたものうんちん
人給金ニ両ニ仕
にんきゅうきんりょうにつかまつり

国立国会図書館　タイトル『洗湯手引草』 請求記号 858-54
ガラス使用

秋永増給金仕七両
放増長右高給金
好雨降仕先休
白不儀掛抱石仕
公道雖云湯屋

訴虎狼如家養
日数新吉集為差眠
撞鐘庵病欲踏給金
遅仕已貪欲却仕禍
湯右和必成病実

三年訴訟而不離
内鰯飯肥干相尋
風怒時早干仕事
生疵病上者干影
但有湯屋有仲間

家業安全奉公
男女入込干停止
悪浦病作事干
頽風抱老物干禁
有法有法

国立国会図書館　タイトル『洗湯手引草』 請求記号 858-54
ガラス使用

有洗定之洗定法様
雑煮頭人名連之処
唯挽引究増揚金
湯様頂戴而成高金
校天剛満時成哉
変而銀三匁ニ落
文化式辰頭番月
庚午皐月中八日
頭叶定仲間十組
丹誠様ゟ九ニ年
当天保十三壬寅
義月三日湯様減
雪降天然時成哉
大小人湯賃定銅
湯様猶如石亀之
新湯出来二疋玉
雑煮降同士合忩
猶様面示有其間
湯屋之文雑煮祀
但定寺冥利之掛引

国立国会図書館　タイトル『洗湯手引草』 請求記号 858-54
ガラス使用

他家業不和意味猶
終既莫雖式高麦
笠大く用心勿も
故未代湯屋のもの
見者誂誘而不識
国者嫉嫌嫌不笑
湯治教訓

大意略

湯屋仲間番組変文化五辰年三月朔日
小田切土佐守様ゟ町触左之通
壱丁目高橋屋次兵衛方ゟ本石町
弐丁目柳屋浪蔵茶沢町
根岸肥前守様ゟ芦川屋次郎治
作右衛門湯屋十組ゟ定
一左之通

国立国会図書館　タイトル『洗湯手引草』　請求記号 858-54
ガラス使用

湯屋十組別附并男女風呂員数

一番組　二番組

本町組　男女十二株　男八株　女八株
日本橋組　男女十六株　男七株　女二七株
堺町組　男女八株　男三株
中橋組　男女八株　男七株
鴻之巣組　男女十七株
京橋組　男女八株　男十三株
東神田組　男女八株　男二株
八丁堀組　男女十六株　男二株　女二株
西神田組　男女七株　男一九株　女一株
霊巌島組　男女八株　男一八株
会十一株
会十株
会七株
会十一株
会十六株
会九株
会十二株
会十六株
会十株
会二十一株
会十六株
会九株
会二十三株
会八十三株
会六十組七十六株

三番組

芝口組　男女十株　男十株　女二株
外神田組　男女十株　一株
会十株
会十一株
下谷組　男女五株　一株
会六株
西久保組　男女五株　男四株
会九株
本郷組　男女十一株
会
麻布組　男女九株　男七株
会十六株
根津組　男女八株　三株
会十一株
会三組四十七株
会四組二十九株

国立国会図書館　タイトル『洗湯手引草』　請求記号 858-54
ガラス使用

六番組

浅草かや町ゟ
江戸組　男女五拾人　男七拾人　女一拾人　合十三拾人　深川南組　男女十七拾人　男一拾人　合十八拾人

観音前ゟ
奥山組　男女二十拾人　男一拾人　合二十一拾人　本所南組　男女二十壱人　合

山内ゟ右同ゟ
同北組　男女十六拾人　合

合二組三十四拾人

七番組

八番組

鰹町組　男女二拾人　男一拾人　合三拾人　糀町組　男女三拾人　六拾人　合九拾人　今戸杉組　男女四拾人　二拾人　合六拾人

赤坂組　男女八拾人　合　四谷組　男女十六拾人　四拾人　女一拾人　合十一拾人　三田組　男女五拾人　三拾人　女一拾人　合九拾人

青山組　男女七拾人　合　西　麻布組　男女九拾人　三拾人　合十二拾人

市谷組　男女七拾人　十拾人　合十七拾人　南　（飛川ゟ南通加ゟ）　男女十一拾人　一拾人　男女五拾人　合十七拾人

合七組七十拾人　合四組四十四拾人

国立国会図書館　タイトル『洗湯手引草』　請求記号 858-54
ガラス使用

九番組

小石川組 男女 十株
男 四株 合十株

小日向組 男女 十一株 合

駒込組 男 十一株 合

組小組合三十八組

男女雨風呂合三百七十一株
男一ト風呂合百四十一株
女一ト風呂合十一株

十組惣合六百二十番組

中奥大行事順番

文化七年申ノ年始
弟一頓人
七月ノ九月迄

柳 亟銀蔵
高橋亟次郎亟
芦川亟次郎亟

弟二一番
同八未二月迄

三河亟八郎亟
大亟亟大之助

弟三二番
同 九月迄

伊勢亟七之助
上総亟義八

弟四三番
同九申二月迄

美亟
能光亟助 七八

弟五四番
同 九月迄

一

湯屋亟萬蔵 暫

一 空永の始より洗湯初まり汚穢也
いまし故有夜番中を流一筋を湯女と
名ばかりなり今のよー町之内に一ト
出来て三保の初より汲まして汚穢故有お止
湯銭一人おさまりまして世の湯屋
なるー

一 婦女の入口へ男女共に洗湯を汚より別に
暖簾を懸て湯より
よる的ハ座敷さ下腐まして洗ひます
拵かつる亟を湯ものごとく洗湯を掃き

国立国会図書館　タイトル『洗湯手引草』　請求記号 858-54
ガラス使用

第六十六番　同十四日三月止　村井　亀次湯　壹人　壹度湯

第七十六番　同　九月止　伊勢屋仁湯　伊勢屋起湯

第八十七番　同三月止　若松屋　八兵衛湯

第九十八番　同　九月止　蕎田屋七左衛湯　伊勢屋善湯

第十九番　同十二月止　福井屋九郎右衛門湯　同治室　十九才

第百番　同　九月止　吳服屋孫兵衛湯　七

第百一番　同十三日三月止　伊勢屋市右衛門湯　七

第百二番　同　九月止　伊勢屋起湯　七

第百三番　同十七日三月止　山城屋六兵衛　和泉屋七右衛門

第百四番　同　九月止　伊勢屋九兵衛　川井屋源兵衛

第百五番　文政元酉三月止　山城屋若狭守　越後屋清兵衛

第百六番　同　九月止　伊勢屋良助　岩屋弥次兵衛

一　湯へ入るに髪を洗ひ湯を浴びるは天保の初迄はあまりなし　文化二丑年ごろ

一　明和の末より安永天明の比より後お場にて着物の色の流るゝ事を洗ひ湯と云ふ　文化三寅年二月ごろ

一　寛政三亥年正月廿七日の御触にて男女入込湯禁止となる

一　享和の初より大きなる桶を湯屋へ置く　文化三寅年三月ごろ

一　文化三寅年三月江戸中大火焼亡の節湯屋の多くは焼残りて居風呂湯不自由なる中にて番組定まりて後の業湯と唱へ湯屋より焼出し見舞の為湯を無代にて施行する事番組湯屋と称す　文化十四丑年七番組に両国橋組浅草橋組神田橋組京橋組日本橋組芝組赤坂組四谷組牛込組市ヶ谷組小石川組本郷組下谷組浅草組の名目にて業湯

国立国会図書館　タイトル『洗湯手引草』　請求記号 858-54
ガラス使用

十八番　平川屋清之湯
同二月廿五日　花　屋金之助

十九番　湯金屋又八
同九月廿五日　花　屋金之助

二十九番　福井屋九郎兵衛湯
同三月廿五日　鍵　屋権四郎

九十番　武蔵屋与七湯
同十月廿五日　山本屋善兵衛

九二番　伊勢屋中之湯
同九月廿五日　伊勢屋善兵衛

九三番　かがや屋定七湯
同九月廿五日　休之助

九四番　伊勢屋伊之湯
同九月廿五日　扇　屋金　兵

九五番　三河屋小兵衛湯
同九月廿五日　かがや屋小兵衛

九六番　伊勢屋助七湯
同九月廿五日　長谷川屋佐兵衛

九七番　川越屋市兵衛湯
同九月廿五日　常陸屋次兵衛

九八番　女土屋市兵衛湯
同九月廿五日　かがや屋佐　助

九九番　湯金屋又八湯
同九月廿五日　鍵　屋文七郎

お楔三十六組の湯屋ゟ右之通
おゐて御止むる

一文化八未年小西ゟ伝拾ひ集つて
初まりくの湯屋ゟ右之通
相成候ゟ

一文政三辰年十月風呂の描ゟ皆々
御止ゟ

一文政十二丑年三月江戸中大火ゟて
百三十六軒焼失ゟ

一文政の末ゟ流し板のるゟ汲湯ゟれ
ゟ

一天保元寅年二番組ゟ六番組ゟ流木
ゟ許出入ゟおゐて細ゟ勝ゟ

一天保三辰年のひゟ年ゟ子法ゟへ
ゟ風呂の図ゟ上ゟふゟ
ゟ

一天保五年年誕生仮名一許ゟ三番組
ゟて組ゟ外ゟ組ゟ練ゟあひ三ゟ年ゟ
御止ゟ

一天保十三年ゟ肩候ゟ湯せん
十ゟ文ゟ同十二丑年ゟ改陽ゟ

三十九番　同八番三月迄　大飛屋湯　駿河屋長兵湯　一天保十三壬寅年十二月中改正ニ付出
四十番　同　九月迄　山本屋長右衛門　伊勢屋徳四郎　諸掟ニ而追々ニ相改ル
四十一番　同乙酉三月迄　和泉屋平八　松屋金七　一市中湯銭大人小人共ニ壱文ツヽ下ル
四十二番　同十三戌三月迄　伊勢屋助七　中屋利助　大人小人ニ而壱文ツヽ下ル
四十三番　同　九月迄　伊勢屋新七　三河屋長兵衛　一右同断
四十四番　同十三戌三月迄　伊勢屋助七　中屋利助　一右同断
四十五番　同　九月迄　伊勢屋新七　三河屋長兵衛　一右同断
四十六番　同十三戌三月迄　伊勢屋助七　中屋利助　一右同断
四十七番　同　九月迄　伊勢屋新七　三河屋長兵衛　一右同断
四十八番　天保元寅三月迄　伊勢屋徳四郎　山本屋長右衛門　一右同断
四十九番　同　九月迄　伊勢屋徳四郎　山本屋長右衛門　一右同断

以上二十年寅年

国立国会図書館　タイトル『洗湯手引草』　請求記号 858-54
ガラス使用

右之旨可申中渡し掛り之者
作法を違背致し候者は
湯札を取上
大黒
番頭
組合
定
一 湯之儀静に致し入
急度お守可申事
一 大人こども大切に
可致事
一 男女入込湯も
停止之事
一 風邪こころを
行ひ不浪お仕舞
可申事
一 湯ぶねへ入湯
仕間敷事
一 金銀をも
落し
一 湯之内人
入湯
一 悪敷病
有之
一 頭巾
可申事

国立国会図書館　タイトル『洗湯手引草』　請求記号 858-54
ガラス使用

五十四番 同八丁目三丁目上
摂津屋□太郎
蔵田屋嘉太郎

五十五番 同 九丁目上
伊勢屋新七
和泉屋甚右衛門

五十六番 同九丁目三丁目上
和泉屋伊太郎
樋屋清兵衛

五十七番 同 九丁目上
摂津屋惣兵衛
大和屋勘太郎

五十八番 同十丁目三丁目上
酒巻屋友右衛門
樋屋与七

五十九番 同 九丁目上
摂津屋半太郎
美濃屋彦助

六十九番 同十一丁目三丁目上
大和屋喜兵衛
加賀屋孫兵衛

六十番 同 九丁目上
山本屋岩太郎
山本屋庄兵衛

六十二番 同十二丁目三丁目上
越前屋七兵衛
十一屋八太郎

六十三番 同 九丁目上
武蔵屋金蔵
京屋喜兵衛

六十四番 同十三丁目三丁目上
池屋藤兵衛
伊賀屋九太郎

大行事半年持ち番

一 うせうの不好衣類御免之様
御用ニて御座候事
一 銭り揃一切不仕候事
右之通御示細之上御入湯可被下候以上
月日 但シ男湯ニ而

定

一 御公儀様御法度之儀堅ク相守可申事
一 火の元念入大切ニ相守り可申事
一 男女入込湯御停止之事
一 風はげしき節ハ宵之内よりも
早仕舞可申事
一 年寄并病後之御かたくさま
御出之節ハ御自分ニて御用心可被下候
一 衣類御脱替いくれまて御用心
可被下候
一 うせうの不好あづかり物一切
いたし不申候
右之通相心得之上御入湯可被成候以上
月日 但シ女湯ニ而

一 此雑之中者諸国徘徊之者有禁
湯屋頭より證文之事

六十四代お續き文化七
午年五月十八日番組
定り天保十三寅年
三月三日湯株減し被仰せ
年数三十三年ニ成
大行事諸帳面預り
三番組ニ而番組お渡

新規買出し平割附
壱株代　両ニ付
一壱とふかわト　五十

文人ニ相定候ハ不知ニ付何町何丁目
家主誰支配下ニ而　男女両風呂　女　男　一ト風呂
湯屋株家主商賣附諸道具一式別
紙帳面之通り譲世話致候処実証
至湯屋より之而同地代其外人
給金其外諸入用並金壱両ニ付
小前諸役湯銭人分ニ而致候ニ付一ヶ月
湯屋家作揚ニ金として壱ヶ月金
何両何分づゝ毎月毎日之通取定上
ヶ可申ニ付毎月ニ而も相滞り不申
文人分ニ差上ヶ可申候金として
金何拾両ニ相渡し申候向後右譲勝手

一壱卜分九ノ　五十五
一壱　分　六十
一九卜弐ノ三毛　六十五
一八卜五ノ七毛　七十
一八　卜　七十五
一七卜五ノ　八十
一七卜六毛　八十五
一六卜六ノ六毛　九十
一六卜三ノ弐毛　九十五

右湯屋金人ニ相談之上加何ニ何而
如何程之差障り之處ニ右商賣附道具諸
帳面不残取揃相渡し申候上ハ右売渡金
受取相違無之候ニて右ニ付貴殿ニ差障
相成候ニ付不及申脇ニ御雑作ニ候ハ、
一御公儀様御法度之儀ハ不及申諸御触
事堅相守あ町法之通り相守申候
大切之候ニ付別而入念大切ニ為
致可申事
一宗旨之儀ハ代々何宗ニ而何町何寺旦
那紛無御座候ニ付手形文人ニ相渡置
候右諸入用之儀何様之事も私方ニ而可申候

一 六ト 百文
一 五ト七ノ壱毛 百五
一 五ト四ノ五毛 百十
一 五ト弐ノ弐毛 百十五
一 五 ト 百二十
一 四ト八ノ 百二十五
一 四ト六ノ弐毛 百三十
一 四ト四ノ四毛 百三十五
一 四ト弐ノ九毛 百四十

趣を以若衆何様之六ヶ敷出入等出来
候共私方ニて請人引受埒明少も御苦労ニ相成
御若方御掛申間敷候事
右之通相改候世為致候上ハ以来何事ニても
表ニ御座候者共相背申間敷候為後日
湯屋株譲り渡証文仍而如件
年号月日
何町譲主 誰
受人 誰
人主 誰
誰殿

湯屋株金請取申金子之事
一 金何拾両也 但文字金之
右之金子請取返済致候処実正也向後ニ於て取戻し
湯屋株ニ付外より故障無之書面之金子無相違遣

一 四ト壱ノ四毛 百四十五
一 四 ト 百五十
一 三ト八ノ四毛 百五十五
一 三ト七ノ五毛 百六十
一 三ト六ノ四毛 百六十五
一 三ト五ノ三毛 百七十
一 三ト四ノ三毛 百七十五
一 三ト三ノ三毛 百八十
一 三ト弐ノ四毛 百八十五

右後ニ至り為後日株金請取証文仍而如件
年号月日
何町譲地主 誰
誰殿

湯屋株売渡申証文之事
一 何町何丁目家主誰支配地面之内 男女両風呂 男女一ト風呂 間口何間奥行何間
間何尺但し湯屋株代金何百何拾両ニ
相定メ売渡候ニ付右金子慥ニ受取申処実正也
然ル上ハ向後ニ至り私親類ハ勿論
横合より違乱申者一切無之万一故障出来
申者御座候ハヽ加判之者罷出急度
埒明少も御苦労御掛申間敷候

一　三ト壱ノ五六毛　百九十
一　三ト〇八毛　百九十五
一　三　ト　弐百
一　弐ト八ノ五六毛　弐百十
一　弐ト七ノ三毛　弐百二十
一　弐ト六ノ壱毛　弐百三十
一　弐ト五ノ　弐百四十
一　弐ト四ノ　弐百五十
一　弐ト三ノ五壱毛　弐百六十

為後日売渡シ申證文仍而如件

年号月日

何町誰地借
家作人　売主　誰
同　家主　誰
同　五人組　誰
同　親類請人　誰

誰殿

奉公人請状之事

一　此誰と申者従先年我等能存候者ニ付
請人ニ相立当何ノ何年何月より来ル何ノ
三月迄給金銭何両ニ相定当被為成下候之
差出申候処実正也御取替として金子の給

一　弐ト弐ノ弐毛　弐百七十
一　弐ト壱ノ四毛　弐百八十
一　弐ト〇六毛　弐百九十
一　弐　ト　三百
一　壱ト九ノ三毛　三百十
一　壱ト八ノ七毛　三百二十
一　壱ト八ノ弐毛　三百三十
一　壱ト七ノ五六毛　三百四十
一　壱ト七ノ一毛　三百五十

只今御渡シ申候文取申候給金之儀者
追々相渡し申候差ニ此者御氣ニ
入不申候ハヽ何時成共御暇被下候ハヽ金子返進
御暇下サレ申候且相定之内ニ而も御暇申
受取申候事

一　御公儀様御法度之儀ハ不及申御家之
御作法少も背キ申間敷候万一欠落
欠落致候仕候ハヽ早速尋出シ差返シ可申候
御取替之品物相違無御座候差上
長病相煩候ハヽ代り人差出し給金之儀も
御差図次第ニ可仕候事

一　宗旨之儀者代々何宗ニ而何町何寺旦

一壱ゝト六ノ六毛　三百六十
一壱ゝト六ノ二毛　三百七十
一壱ゝト五ノ八毛　三百八十
一壱ゝト五ノ四毛　三百九十
一壱ゝト五ノ　四百
一壱ゝト四ノ五毛　四百十
一壱ゝト四ノ二毛　四百二十
一壱ゝト三ノ九毛　四百三十
一壱ゝト三ノ六毛　四百四十

一那ゝ紛湯屋ニ到寺手形株家ニ而
並ニ而入用之節ハ何時ニても差出し
可申趣ニ而若株付何程之六ヶ敷出入
致出来候共株主ゝ文人ニ差出可申候
少も御苦労御掛ケ申間敷候且又
定之外何ヶ年ニ而も住居致候共兼而之
趣株主文人ニ相渡湯屋仲間ニ而日済
状仍如件

年号月日

何町維店
文人誰
同
人主誰
誰殿

引取申一札之事

一壱ゝト三ノ三毛　四百五十
一壱ゝト三ノ　四百六十
一壱ゝト弐ノ七毛　四百七十
一壱ゝト弐ノ五毛　四百八十
一壱ゝト弐ノ二毛　四百九十
一壱ゝト弐ノ　五百
一壱ゝト一ノ七毛　五百十
一壱ゝト一ノ五毛　五百二十
一壱ゝト一ノ三毛　五百三十

一株譲人之者方ゟ此度私方ニ湯屋株
誰儀御座候ニ付下直人差入雑物証文
仍之此段請取申候上ハ以来若
候而何程之六ヶ敷出来候共引取申候
壱ヶ年ニ而も御苦労御掛ケ申間敷候
後日之引取一札仍如件

年号月日

何町維店
引取人誰
誰殿

諸木割木坪割之事

壱ト坪
高サ壱間
幅壱間
長サ壱間

右何程之何間何歩ト高巾長掛合ゝ
積継木八大八三人ニ而五ッ車ニ而積べし

一壱ト二毛　五百壱十　悪きを切レホ六車脇へ積廻し

一壱ト九毛　五百五十　一六化三已年柿き松ヶ新ら毛ニ以前切

一壱ト七毛　五百六十　松切ら毛ニ百七拾九ら壱ヶ年ニ船

一壱ト五毛　五百七十　傳車カ九銀百弐拾九ら上り

一壱ト三毛　五百八十　一三浦松ヶ両ニ百弐拾九ら壱ヶ年ニ船

一壱ト壱毛　五百九十　傳車カ九銀百弐拾九ら上り

一壱　ト　六　百　一常陸下総ニ松ヶ俗ニ九ら前掛ニ以

右荒增ハ用斗除ク　両ニ付三百九ら壱ヶ年ニ船傳車

力九銀百拾弐ら上り

右例三寶日ヨリ

右松ヶ両ニ付弐ら掛ニ九ら右松ヶ上り

緒本高切レホ七ニ壱ヶ年ニ

ニ九ル事

一拙き事ニ御座候へ共御公邸ニ於テ一ノ仕方ニ

湯ニ入ル時ハ天正比ニ伊勢国山田ニ

遣ハシ候楽浅ヲ文ヲ入湯ニ入ルニ

繁昌ニ御座候ヘ湯ニ所ニ湯風呂

一寛文二寅年大佛ニ造湯ニ

御奉行所ニ

一松女房抱ニ入ル

一湯風呂ニ明ヶ六ツ時ヨリ

右三ヶ條　御免流シ

一延宝三卯年十月御文

一元禄十二卯年六月御書ニ

一享保十一年八月廿六日横山町ニ而新規湯屋取建致候者有之候処
ゟ出候人方ゟ而ハ公儀ゟ被仰渡候ハ有之哉ニ存候ニ付
一享和三亥年十一月中町　御触左ニ通
町中ニ而新規湯屋渡世致候ハ決而ハ
ゟ而ハ公儀ゟ被仰渡候ハ有来り湯屋渡世ニ候ハ
ゟ之ゟ町内ニ而ハ取出ニ而ハ先達ゟ御触ニ通男女入込湯致候
渡世ニ候ハ御免ニ相成候ハ熟談ニ及候ハ
急度相心得可申候
右之通　御奉行所ゟ被仰渡候ニ付
家持借屋ニ至迄洩無ク可相触候
享和三亥年十一月

町年寄
役人

永田三年之月

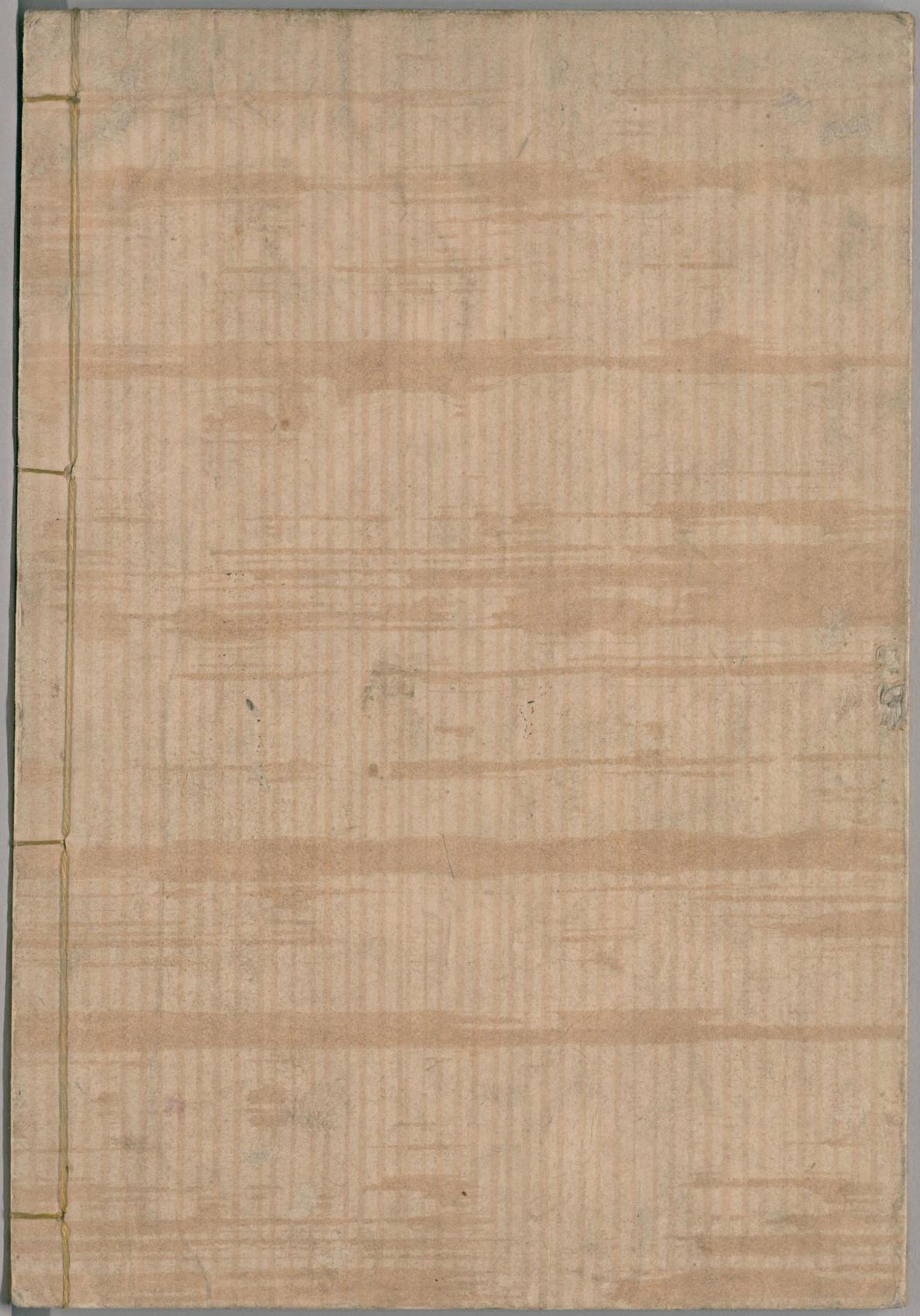
去ル三寅の日より初る事

国立国会図書館　タイトル『洗湯手引草』　請求記号 858-54
ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『洗湯手引草』請求記号 858-54

ガラス使用

858
54



国立国会図書館　　タイトル『洗湯手引草』　請求記号 858-54

ガラス使用